

古英語の語形成と韻律

藤原保明

はじめに

古英語の複合語は散文より韻文において多く用いられているが、これには韻律が深く関わっていることは容易に察知できる。古英詩の韻律研究史は100年を超え、これまでさまざまな枠組みが提案されてきたが、残念なことに、古英詩の韻律の諸相を余すところなく捉え得る強力な枠組みは存在せず (Minkova 2003: 34)、複合語や接辞付加語と韻律の関係も明確ではない。そこで、本稿では古英語の語形成と韻律の関係をとらえる枠組みを提示したい。今回、古英詩『創世記 B』(*Genesis B*) を分析対象に選んだが、この理由は、藤原 (2003) で明らかにしたとおり、この詩が頭韻語の選択に関して基本原則にかなり忠実であることから、語形成に関しても興味深い情報が得られる可能性が高いからである。なお、データは Doane (1991) 編の *The Saxon Genesis* から抽出することとし、頭韻の原則を始めとする古英詩の韻律の枠組みは藤原 (1990) に準拠する。

0. 古英語の語形成

本稿では、語形成を接辞付加と複合に限定し、臨時語 (nonce word) とゼロ派生 (zero-derivation) は分析の対象から除外した。この理由は、臨時語については、たとえば「その場しのぎに創られた語句」という一般的な定義に従うと、消失した文献が多い古英語の場合、当該の語句が果たして一回きりのものかどうか実証しにくいこと、一方、ゼロ派生については、「語根+ゼロ形態素から形成された語」という定義に従うと、屈折言語である古英語の場合、たとえば名詞から動詞をゼロ派生することは考えられず、該当例は皆無となるからである (Bauer 1983:45-47; Bussman 1996:328)。

1. 接辞付加と韻律

接辞のうち、接頭辞は言語強勢の有無によって2種類に分けられる。このうち、強勢を担う接頭辞については、頭韻に関与しうることから、本稿では接頭辞付加語と頭韻の関係を明らかにしたい。なお、接頭辞に主強勢がある場合、語根には副強勢が置かれるが、*úp-engel* 'heavenly angel' (*Andreas* 226a), *æfter-ýld* 'maturity' (*Guthlac* 496a), *ún-æaðe* 'hard' (*Andreas* 205a) のように、副強勢を担う音節の初頭音(すなわち、声門閉鎖音 [ʔ])も頭韻に関与する可能性があることから、接頭辞付加語の場合には、語根の強勢の程度と頭韻の関係も焦点となる。一方、無強勢の接頭辞の場合、接頭辞は頭韻しないが、詩のリズムへの関与は解明されねばならない。接尾辞の場合、強勢の程度と頭韻、およびリズムとの関係を明らかにせねばならない。

1.1. 接頭辞付加と韻律

Genesis B は616行(このうち2行は不完全)から成る短詩であることから、用いられている接頭辞の種類はそれほど多くはないが、この詩における接頭辞の韻律上の特徴を知るには十分な例が抽出できる。これらの接頭辞は、他の古英詩の場合と全く同様に、強勢付与という観点から2つのグループに分けられる。すなわち、どの語彙範疇の語幹に付加されても強勢を担わないもの(以下、P_fと略す)と、動詞以外の語幹に付加されると主強勢を担うもの(以下、P_gと略す)である(Fujiwara 1977:304-307)。

1.2. P_f付加語と韻律

最初に、P_fおよび動詞に付加されたP_gはいずれも無強勢であることから頭韻には関与しない。したがって、これらの無強勢の接頭辞と古英詩の韻律との接点はリズムのみとなる。古英詩の半行は、短いものは3音節、長いものは10音節を越えることから、半行におけるリズムという量的特徴を統一的に捉えることは容易ではなく、学者の意見も一致していない(Minkova 2003:34-42)。そこで、本稿では、接頭辞が最も一般的な4音節半行においてリズム上どのような役割を果たしているのかについて考察してみたい。

Genesis A では *earc Noes* 'the ark of Noah' (1423a), *Sem and Cham* 'Shem and Ham' (1551b), *Loth on-fon* 'Lot (would never) receive' (1938b) など、3音節半行は珍しくはないが、*Genesis B* には3音節以下の半行は存在

しない。したがって、最も短い半行は4音節ということになる。これらの半行は、第一半行では97例(全体の15.80%)、第二半行では113例(全体の18.40%)あり、後者が前者を若干上回っている。しかし、この程度の頻度差は、たとえば、第二半行では二重頭韻が生じないため、半行で用いられる語数が第一半行より減少する当然の結果であると考えられることから、問題視するには及ばない。4音節半行のうち、接頭辞が含まれるのは第一半行では13例(13.40%)、第二半行では23例(20.35%)ある。この頻度数そのものについては、絶対数が少ないこともさることながら、他の古英詩について同様の数値を出し、比較対象として初めて意味をもってくることから、本稿では掘り下げて検討することはしない。P₆を含む4音節半行は、第一半行に6例、第二半行に5例用いられているが、これらの多くはリズムというより頭韻に関与していることから、これらについてもここでは検討はしない。したがって、残された第一半行の7例と第二半行の18例のP₆が半行のリズムを構成する上で不可欠なものかどうか焦点を当てることになる。

最初に、(1a)の接頭辞付加語の場合について検討したい。これらの語からP₆を削除すると、いずれも語の意味や機能などに何らかの不都合が生じる。たとえばon-geanを例にとると、on-のないgenという語形では‘against, toward’という意味は表せないこと、folc-ge-stælnaの場合には、ge-のない語形は古英語では用いられていないこと、ge-worht(<ge-wyrca)とge-hyrde(<ge-hieran)の場合、ge-のない語形は*Genesis B*では別の意味を表すこと、a-bolgen(<a-belgan)の場合、a-のない語では他動詞が自動詞に切り変ることなどである。これに対して、(1b)の場合、接頭辞がなくても語幹は統語的または意味的に変わらない。事実、これら5例はすべて接頭辞のない語形が同じ意味で*Genesis B*で用いられている。しかし、注目には値するのは、接頭辞が不可欠と思われる(1a)のような語は当該の半行において多く用いられるのに対して、接頭辞がなくても支障が出ないと思われる(1b)のような語は少数に限られていることである。古英語の接頭辞の中で、語幹の意味や機能に及ぼす影響が最も小さく、付加や削除も容易であり、最も高い頻度で用いられているのはge-であるが、*Genesis B*のすべての4音節半行(合計210例)のうち、ge-付加語は9例にすぎない。仮に、4音節が半行の最小の量的条件であるなら、この条件を満たすためにもっと多くのge-が用いられていても不自然ではない。このように、半行の音節数を4以上にするためにge-などのP₆を付加したという明白な証拠が乏しいことから、少なくとも*Genesis B*

に関する限り、Pf₁と半行のリズムの間には密接な関係はなさそうである。なお、本稿では、接頭辞と語根、複合語の構成素間の境界を明示するためにハイフンを付し、頭韻する初頭音は肉太の活字で表す。また、語根と屈折語尾の境界は必要に応じて明示することにする。母音の音量は強勢の表示と重なると煩雑になることから、特に必要がない限り明示しない。

- (1) a. on-gean 'against, toward' (264a, 615a), folc-ge-stælna 'comrade in arms' (271a), ge-worht 'set up' (273b), ge-hyrde 'heard' (292b), ge-wrinc 'torture' (317a), on-geaton 'perceived' (334b), be-swican 'deceive' (451b), on-cnawan 'recognize' (534b), on-sende 'send' (541b), a-bolgen 'enraged' (552a), ge-þencan 'think out' (561b), for-læteð 'leave alone' (573b, 632b, 693b), ge-spræc 'spoke' (580a), for-don 'corrupt' (629b), for-weorpan 'throw down' (691b), on-fon 'receive' (697b), ge-timbro 'structure' (739b)
- b. ge-seon 'see' (566a), be-healdan 'hold, possess' (366b), ge-styran 'steer, lead' (568b), for-golden 'requited' (756b), for-bræcon 'broke (a command)' (798b)

1.3. Pf₂付加語と韻律

Genesis B の場合、Pf₂は(2)に示したとおり13種類、その付加語は延べ37例ある。このうち、for-weardはClark-Hall(1960:135)が指摘しているように、forð-weard 'continually'と同義であること、および、for-が頭韻していることから、Pf₁のfor-の強意形ではなく、forð-の異形とみなし、Pf₂に加えた。一方、and-swarodeの場合、動詞であることから、一般に接頭辞には強勢がないが、and-に強勢を有する名詞and-swaruの派生語であることにより、and-には主強勢が置かれている。次に、un-は名詞・形容詞・副詞に付加された場合でも無強勢の例が生じる唯一のPf₂であるが、*Genesis B*においてもun-wúrðlice 'unworthily' (440a), un-trýowða 'betrayal' (581a), un-wéred 'unprotected' (812a)の3例ではun-は頭韻には加わらず、無強勢と考えられることから、これらの3例は(2)には含まれていない。

- (2) a-: a-wiht 'at all' (290b)
- an-: an-gin 'undertaking' (578a)
- and-: and-saca 'enemy' (320a, 442b), and-sware 'answer' (557a), and-swarode 'answered' (827b), and-wyrde 'answer' (573a)

- æg-: æg-hwilec 'everybody, each' (465b, 480a)
 ed-: ed-neow 'renewed' (314b)
 for-: for-weard 'always' (788a)
 hinn-: hinn-sið 'journey hence, death' (718a, 721a)
 ofer-: ofer-hygd 'pride' (328a), ofer-mede 'pride' (293b), ofer-metto
 'pride' (332a, 337a, 351a), ofer-mod 'proud' (262b, 272a, 338a)
 or-: or-sorge 'free of sorrow' (804a)
 sin-: sin-hiwan 'married couple' (778a, 789b)
 þurf-: þurh-longe 'very long' (307a)
 un-: un-fæle 'evil' (723a), un-ge-lic 'unlike' (356b, 612b), un-ge-met 'in-
 measurably' (313b), un-hylde 'disfavor' (729b), un-ræde 'folly' (700
 a), un-riht 'injustice' (589a), un-rim 'a countless number' (335b,
 776a), un-sælgæ 'unblessed' (637a), un-treow 'faithlessness, treach-
 ery' (773b)
 wiðer-: wiðer-medo 'hostility' (660b)

まず、第一半行の場合、P_F付加語の22例において、接頭辞は(3a)の1例を除いてすべて頭韻に関与していることから、P_F付加と頭韻の関係がきわめて深いことが分かる。しかし、両者の関係をより明確に示すには、若干の考察が必要となる。まず第一に、第一半行の単一頭韻は、(3a, b)のように頭韻階級が同等または上位にある範疇の語のうち、半行のより左に位置する語、すなわち、(3a)の *hynða* と (3b)の *þurh-longe* に実現する(藤原1990:284-285)。このような位置を占める語の場合、強勢音節の初頭音にはすべて頭韻の優先権があることから、詩人がこの初頭音と同じ音を意図的に配置せねばならないのは、第二半行の最初の強勢音節においてである。したがって、(3b)の *þurh-longe* の接頭辞 *þurh-* は頭韻の必要から付加されたのではないと言える。一方、(3c, d)のような11例では二重頭韻が実現しているが、第一半行ですでに音合わせが行われていることから、この種の半行では接頭辞の付加は頭韻と深い関わりがあると思われる。もっとも、P_F付加語が半行の最初の位置を占める(3c)の *sin-hiwan* のような語については、(3b)の *þurh-longe* と同じ条件であることから、接頭辞を付加したのは頭韻の必要によるのではない。しかし、(3d)の *hinn-* のような場合には、詩人は音合わせのために先行する語の初頭音と同じ音で始まる接頭辞 *hinn-* を意図的に付加したと言える。興味深いことに、(3c)の *sin-hiwan* ような場合はわずか2例であるのに

対して、(3d)の *hinn-sið* のような場合は9例も用いられていることから、詩人が PE_2 付加語を用いたのは頭韻の必要上であることの有力な証拠になる。次に、第二半行の場合、第一半行の統語上、意味上の制約に加えて、詩人は強勢音節において音合わせをせねばならない。このような事情を反映して、第二半行に生じる15例の PE_2 付加語のうち、最初の強勢部に PE_2 付加語が用いられている(3e)のような場合は11例あり、 PE_2 付加語が2番目の強勢部に生じていて、頭韻に加わらない(3f)のような4例の約3倍の頻度で用いられている。以上の分析結果から、頭韻形式と左右の半行の区別にかかわらず、詩人は大半の例において PE_2 付加語を頭韻の必要をまかなうために用いていることが分かる。なお、本稿では / は半行の境界を示すものとする。

(3) a. *hynða un-rim ; / for-þam him hige-sorga* (776)

'numberless harms ; therefore sorrows (burned in) their (breasts)'

b. *þurh-longe swa, / þreo niht and daga* (307)

'for as long as three nights and days'

c. *sin-hiwan somed / and sige-drihten* (778)

'the married couple together (fell to prayer,) and (addressed) the Lord of victory'

d. *helle and hinn-sið / þeah hit nære haten swa* (718)

'hell and death, though it was not called so'

e. *sorh-worda somed. / sin-hiwan twa.* (789)

'the two married couple (spoke of many) words of sorrow'

f. *ealra feonda ge-hwilt, / fyr ed-neowe* (314)

'each of all the fiends (feels) fire new-kindled'

1.4. 派生接尾辞付加と韻律

古英語の接尾辞に対する最大の関心は言語強勢の有無と頭韻への関与にある。とりわけ派生接尾辞は種類も多く、2音節から成るものはもとより、屈折接尾辞の付加により多音節になることも多いことから、韻律強勢を担う可能性がある。一方、*un-ge-lic* 'dissimilar' (612b) の *lic* 'like' と *glæd-lic* 'bright' (615a) の *-lic* 'ly' のように、語根の形容詞と接尾辞が同形の場合、機能上の相違以外に、言語上どのような特徴を示すのかという興味もある。そこで、この節では派生接尾辞付加語と韻律の関係について考察したい。手がかりになるとと思われるのは *ut-an* 'from outside', *inn-an* 'within', *eall-enga* 'entirely',

lað-lic 'hateful' のように、語根と接尾辞の初頭音が一致する場合（母音で始まる語の場合には声門閉鎖音 [ʔ]）である。すなわち、これらの語の2つの初頭音が見かけどおり一致しておれば、二重頭韻の例となり、接尾辞にはかなり強い強勢が付与されていることになる。Genesis B の場合、この種の語は（4a）のように第一半行には5例、第二半行には（4b~d）のように9例用いられている。二重頭韻が生じないはずの第二半行にも多く生じることから判断すると、これら13例では語根と接尾辞の初頭音は偶然一致しているにすぎないことになる。したがって、すべての例において単一頭韻が実現していて、接尾辞の第一音節は頭韻するのに十分な強さの強勢を担っていなかったことになる。

- (4) a. ut-an and inn-an / siþþan ic þæs ofætes on-bat (677)
 'within and without since I tasted its fruit'
 b. þonne wæs se oðer / eall-enga sweart (477)
 'then the other was entirely black'
 c. læstan willað. / Hwæt scal þe swa lað-lic strið (663)
 'will fulfill. What shall such horrible strife (do) for you'
 d. ofet un-fæle. / Swa hit him on inn-an com (723)
 'the evil fruit. When it entered into him'

2. 複合語と韻律

本稿では、独立語が複数結合した語を複合語 (compound) とみなす。古英語の複合語の場合、現代英語の場合と同様に、第一構成素には主強勢、第二構成素には副強勢が置かれる (góld-spédig 'rich in gold', héofon-ric 'kingdom of heaven', wórd-hòrd 'treasury of words')。独立語の結合という規定により、ed-wit 'reproach', mis-lic 'unlike', or-sawle 'lifeless', sin-gal 'everlasting', un-rim 'countless number' のような接頭辞付加語との区別が可能となる。しかし、第一構成素が接頭辞なのか、それとも接頭辞と同形の前置詞または副詞なのかを区別しにくい æt-rihte 'almost', for-habban 'retain', ofer-hygd 'arrogance', to-somne 'together', up-rador 'upper heaven' のような例はまれではない。その上、これらの語の最初の構成素が主強勢を担う場合も少なくないことから、複合語か否かの判断がむずかしくなることがある。そこで、本稿では、独立語に付加される、語形変化をしない æt, for, ofer

などはすべて接頭辞とみなす。もっとも、第一構成素が屈折語尾を伴わず、形態上もしくは文法上「中立」(neutral)であり、複合語とみなされている dream-healdende 'happy, joyful' (*Beowulf* 1227b), brogden-mæel 'damascened sword' (*Beowulf* 1663a), hea-byrig 'high city' (*Genesis A* 1821b), eall-tela 'quite well' (*Genesis A* 1905b) のような場合でも、句とみなす解釈も不可能ではないことから、複合語を独立語の結合と規定しても問題がすべて解消するわけではない。なお、古英語の場合、複合語は一般に2つの独立語から成るが、(5)のように、3つの語が結合していることもある。ちなみに、(5)の例はいずれも最初の2語が結合してできた複合語に、さらに3番目の語が加わったものであり、強勢従属が繰り返して生じた結果、2番目の語の強勢は最も弱くなっている。主強勢を1、第2次強勢を2、第3次強勢を3で表すと、(5)の複合語はいずれも1-3-2という強勢型を示すことになる。

(5) geo-sceaft-gasta 'fated spirit' (*Beowulf* 1266a)

hago-steald-mon 'bachelor, youth, warrior' (*Riddle* 14. 2a)

laþ-wende-mod 'hostile in spirit' (*Genesis B* 448b)

wulf-heafod-treo 'gallows, cross' (*Riddle* 55. 12a)

古英語の複合語を韻律の観点から論じる場合、構成素間での機能分担に注意せねばならない。すなわち、第一構成素は、すでに述べたとおり、形態上もしくは文法上中立であり、屈折することなく、優先的に頭韻に加わる。一方、第二構成素は文法上の機能を担うものの、頭韻への関与は随意的であり、頭韻するのは第一構成素が頭韻する場合に限られる。したがって、第二構成素が頭韻に関与すると、複合語には常に二重頭韻が実現することになる。以上のことから、複合語は古英詩においては頭韻の必要をまかなう格好の手段であることが分かる。もっとも、古英語の主強勢は語根の第一音節に置かれ、単音節語も無(または弱)強勢語尾を伴うことが多いことから、語全体が強弱という語強勢型を示す場合が多くなる。そして、このような語が結合した複合語の場合、語全体は強弱という語強勢型を示すことになる。それゆえ、複合語は頭韻のみならず、リズムの面からも古英詩に関与しうる。もっとも、複合語は韻律と無関係と思われる散文でも用いられていることから、詩の中の複合語がすべて韻律に関与しているとはみなせない。そこで、本稿では、*Genesis B* で用いられている複合語と韻律の関係を明らかにするのに先立ち、(6)のような解釈上の基準を設定しておく。なお、この基準は、当時の詩人たちがどのような手順で詩を創作したのか分からないことから、加筆・削除といった推敲作業を全く前

提としない最も厳しいものである。なお、(6)は、第一構成素を Pe 、複合語を Pe 付加語、第二構成素を語根に置き換えれば、 Pe 付加語の場合にも用いることができる。

- (6) a. 第一半行において、複合語の第一構成素が単一または二重頭韻の最初の頭韻に関与している場合、この複合語は頭韻を意図して用いられたものとはみなさない。
- b. 二重頭韻が実現している半行において、複合語の第一構成素が二番目の頭韻に関与している場合、この複合語は頭韻を意図して用いられた可能性が高い。
- c. 複合語の第二構成素も頭韻に加わり、語全体が二重頭韻を形成している場合、この複合語は意図的に作られた可能性が高い。
- d. 第二半行の場合、頭韻する複合語は頭韻を意図して用いられた可能性が高い。

2.1. 第一半行における複合語と頭韻

最初に、第一半行の場合、複合語の第一構成素が単一頭韻に関与している(7a)のような例は37ある。一方、複合語の第一構成素が二重頭韻の最初の頭韻を構成している(7b)のような場合は11例ある。しかし、いずれも(6a)の基準に従うと、詩人が頭韻を意図してこれらの複合語を用いたものとは認められない。一方、複合語の最初の構成素が2番目の頭韻に関与している(7c)のような例は、(6b)の基準に従うと、詩人は二重頭韻を実現させるために複合語を用いた可能性が高い。興味深いことに、この種の例は(7b)のような場合の約2.4倍の26例も生じていることから、詩人は二重頭韻の例を増やそうとして複合語を多く用いていると言える。一方、(7d, e)では複合語の2つの構成素が二重頭韻を形成している。該当例はこの2つだけであるが、(6c)の基準に従うと意図的に創られた可能性が高い。ちなみに、この種の複合語は他の古英詩においてもそれほど例が多くなく、『創世記B』とはほぼ同じ規模の『ユリアナ』(全731行)では5例、『不死鳥』(全677行)では8例である。なお、(7e)は三重頭韻の可能性はあるが、第一半行という単位内で韻律上の強勢従属を想定すると、helmの強勢はかなり弱化していることから、初頭音hが頭韻の資格を有していたかどうかは疑わしい。次に、複合語が頭韻に関与しない(7f)のような例は、第一半行で用いられている78例の複合語のうち、*ambyht-secg* 'messenger' (582a)を含めて2例にすぎない。これまでの事

実を総合すると、少なくとも第一半行に関する限り、複合語は頭韻ときわめて高い相関を示すと言える。

- (7) a. þurh hand-mægen, / halig drihten (247)
 'The Holy Lord with bodily strength'
 b. gylp-word on-gean, / nolde gode beowian (264)
 'boasting words against (Him), would not serve God'
 c. hatne heaðo-welm / helle to-middes (324)
 'hot flame in the midst of hell'
 d. to scur-sceade / ne sceattes wiht (813)
 'as protection against storms, nor (have we) any property'
 e. hæleð-helm on heafod a-sette / and þone full hearde ge-band (444)
 '(He) put on a helmet of invisibility, and bound it very tightly'
 f. godes hand-ge-sceaft, / gearone funde (455)
 '(he) found (Adam,) God's creature, ready'

2.2. 第二半行における複合語と頭韻

次に、第二半行の場合、単一頭韻のみが実現することから、複合語の焦点は頭韻の有無に絞られる。該当するのは42例であるが、このうち(8a, b)のように頭韻に加わっているのは40例、頭韻していないのは(8c)の hand-ge-weorc と æl-mihtig 'almighty' (849) の2例にすぎない。このことから、複合語は第二半行においても頭韻との相関がきわめて高いことが分かる。ちなみに、(8a)では複合語に先行する動詞 sohte 'sought' は頭韻していないが、これは動詞が名詞より頭韻階級が低いことから、原則に忠実に従った結果である。一方、(8c)では動詞 stod 'stood' が頭韻し、上位の階級にある後続の複合名詞が頭韻せず、頭韻階級の原則が破られているが、これは第二半行に特有の詩的許容の典型的な例である(藤原1991: 284-285)。

- (8) a. a-hof hine wið his hearran, / sohte hete-spræce (263)
 'lifted himself up against his lord, sought defiant speech'
 b. heora herran hete, / heofon-cyninges nið (768)
 'the enmity of God, their Lord, the hate of the King of Heaven'
 c. stið-ferhð cyning. / stod his hand-ge-weorc (241)
 'the determined King. The creature of His stood'

3. 結び

拘束形式の接頭辞と自由形式の複合語の第一構成素は、形態上の特徴は異なるものの、頭韻上はきわめてよく似た相関関係にある。すなわち、*Genesis B* の場合、主強勢を担う接頭辞 *Pf* と、語レベルの最大強勢を担う複合語の第一構成素はいずれも頭韻ときわめて高い相関を示す。この相関は二重頭韻の 2 番目の位置と第一半行の頭韻位置においてきわめて高くなることから、詩人は *Pf* 付加語と複合語をほとんどの例において頭韻の必要をまかなうために用いていることが分かる。

参考文献

- Bauer, Laurie. 1983. *English Word-formation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bussmann, Hadumod. (ed.) 1995. *Routledge Dictionary of Language and Linguistics*. London and New York: Routledge.
- Clark Hall, John R. (ed.) 1960. *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Doane, A. N. (ed.) 1978. *Genesis A: A New Edition*. Wisconsin: The University of Wisconsin Press.
- . (ed.) 1991. *The Saxon Genesis*. Wisconsin: The University of Wisconsin press.
- Fujiwara, Yasuaki. (藤原保明) 1977. 'Stress in *Andreas*' *Studies in English Linguistics*. Vol. 5. Tokyo: Asahi Press.
- . 1990. 「古英詩韻律研究」広島: 溪水社.
- . 2003. 「古英詩『創世記 B』における頭韻語の選択」『言語文化論集』第62号.
- Marchand, Hans. 1969. *The Categories and Types of Present-Day English Word-Formation*. München: C. H. Beck'sche.
- Minkova, Donka. 2003. *Alliteration and Sound Change in Early English*. Cambridge: Cambridge University Press.